

機関番号：53203

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007～2010

課題番号：19520381

研究課題名 (和文) 連体修飾節構造に関する日韓対照研究

研究課題名 (英文) Relative Clause Constructions:
A Contrastive study of Japanese and Korean

研究代表者

小熊 猛 (KOGUMA TAKESHI)

富山高等専門学校・一般教養科・准教授

研究者番号：60311015

研究成果の概要 (和文)：日韓両言語の連体修飾節構文は、いずれも節内主語と被修飾名詞句 (主要部) との意味概念上の結束関係に基づいて意味が合成されており、参照点関係に基づく関係節化方略を反映していると考えられる。属格主語連体修飾節、主格主語連体修飾節はそれぞれ R/T 認知, tr/lm 認知の現れであるとする「認知モード転換モデル」は、韓国語連体修飾節構文の主語のマーキング全般を理論的に自然に捉えることができそうである。

研究成果の概要 (英文)：Korean, as well as Japanese, is assumed to employ REFERENCE-POINT based strategy in forming adnominal-clause constructions. The nominative- and genitive-marking of adnominal-clause subject in Korean can be best characterized as reflecting REFERENCE-POINT / TARGET and TRAJECTORY / LANDMARK conceptualization, respectively.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：意味論, 連体修飾, 関係節化, 主語マーキング, 認知文法, 参照点構造

1. 研究開始当初の背景

日本語の連体修飾節内の主語は、(a)および(b)のように、主格助詞「が」に代えて属格助詞「の」でもマーク可能であり、この格助詞交替は意味的な違いを事実上は生まない。

- (a) [太郎 {が/の} 買った]本
(b) [何か {が/の} 焦げる]臭い

このような現象は、ガノ (主格・属格) 交替と呼ばれ、一般に日本語に特有な現象として分析されてきた。

ところが、韓国語に関して、生産性は極めて低いとはいえ、現代韓国語においてもこの属格主語を伴う連体修飾節が確認できることが指摘されている。

日本語の連体修飾節構文は、関係代名詞という文法的要素が現れないという点ばかりでなく、被修飾名詞が修飾節内述語と統語的

関係がない(b)に示すような連体修飾表現(語用論的關係節)が存在する点でも英語などの言語における関係節と振る舞いが異なる。この点に関しても、韓国語は日本語と同様の特徴を示す。

以上2点の類似点を踏まえると、日韓両言語の連体修飾構造はともに、英語などの言語の関係節化とは質的に異なるメカニズムに基づいていることが予測される。

2. 研究の目的

関係節化に関して、統語的、語用論的方略を併せ持つという分析もある日本語や韓国語のような言語は、実は「参照点認知に基づく方略による関係節化を反映している」と仮定し、日韓の方言にも着目し、日韓対照研究を通して以下の2点を明らかにしようと試みた。

- ・韓国語の属格主語と他動性との相関の解明
- ・認知モード分析の類型論的妥当性の解明

3. 研究の方法

日本語の方言に関しては、主節での属格主語が容認される九州(熊本)の方言を対象にその振る舞いに関して現地調査を実施した。

韓国語の方言については、釜山近郊出身のインフォーマントに行った予備的な聞き取り調査で、日本語の「よく」にあたる副詞を伴うとき通常は容認されない連体修飾節でも幾分のその容認度が増すと興味深い現象が確認できた。これを踏まえ、この適格性判断の違いは、該当のインフォーマント個人のレベルでの容認度の揺れであるのか、あるいは標準的韓国語より南部方言においては属格主語に対する容認性が高い傾向が認められるか否かを韓国南部(麗水)で現地調査を行った。

4. 研究成果

本研究では、日本語と韓国語の連体修飾節表現の対照、とりわけ両言語の方言レベルでの振る舞いに注目した調査分析を通して、「認知モード転換」という観点に基づく日本語の連体修飾節内の主語の言語化に関する一般化の理論的妥当性を、韓国語の連体修飾節構造への適用可能性という観点から検証を試みた。

(1) 関係節化方略

先行研究では、語用論的關係節が存在する日本語や韓国語のような言語は統語的關係節化方略(Syntax-Based Strategy)に加えて語用論的關係節化方略(Pragmatics-Based Strategy)

を併せ持つとする言語類型論(Hirano 2004)や、日本語の連体修飾構文は統語的というよりもむしろ語用論的あるいは意味論的メカニズムを反映しているとするフレーム意味論分析(Matsumoto 1988, 1996)が提案されている。

本研究は、日本語の連体修飾構文は複数の質の異なる関係節化メカニズムを反映しているのではなく、参照点関係に基づく関係節化方略(Reference-Point Based Strategy)を反映しているタイプと一般化されるべきであるとする分析(Koguma2007)の妥当性を、韓国語と対照することで検証を行った。

ここで、本研究において前提となる認知的分析(Koguma 2007)をここで概観する。

(2) 「認知モード転換」に基づく分析

文法的要素である格助詞「ノ」、「ガ」は、客観的な意味内容(semantic content)がきわめて希薄で機能的な働きをするため、その意味の違いは認知プロセスに求められる。

2つの対応関係にある「ノ」連体修飾表現および「ガ」連体修飾表現はそれぞれ異なる認知プロセスを反映している。「ノ」格連体節とは連体節内主語を参照点として標的である被修飾名詞を同定する参照点関係をベースにR/T認知(Reference-Point/Target 認知)を反映した連体修飾構文であり、この意味構造が改めてtr/lm認知(trajector/landmark 認知)で捉え直されたものが「ガ」格連体節である。R/T認知で捉えられた認知像がいつでもtr/lm認知で捉え直しが可能であることがガ/ノ(主格・属格)交替の随意性の正体なのであり、2つの連体節表現は反映する認知モードが異なるだけで、同一の合成意味構造を有しているために意味的対立が生じない。

R/T認知(「ノ」)からtr/lm認知(「ガ」)へとする認知モード転換分析は、連体節内の主語の格マーキングの通時的言語変化を自然に捉える。また、現代日本語は連体節においてtr/lm認知による捉え直しが行われるのが無標でありR/T認知で捉えられた認知像がそのまま言語化されるのが有標であるに過ぎないということであり、共時的に「ガ」が無標であり、「ノ」が有標である言語事実と矛盾するものではない。

連体節内主語の「ガ」格主語の台頭には、(i)日本語全体としてのtr/lm認知での捉え直しへの性向と、(ii)他動性の2つの要因が関わっていると主張し、形容詞述部などのように他動性が極めて低いケースでは、他動性に起因するtr/lm認知による捉え直しの動機づけが弱く、その結果、「ガ」格主語の標準化が進んでおらず、「ノ」格主語が好まれる傾向がみとめられると論じた。

他動性制約に関しては、「ヲ」格名詞は節レベルのlm参与体であり、必然的にtr/lm認知

を前提としているため、最終合成意味構造においても tr/lm 認知での捉え直しが動機づけられる。また、他動性制約の反例については、参照点関係に基づく間接受け身と、それ以外のタイプに大別され、後者は Hopper and Thompson (1980)が指摘する他動性の尺度に照らして低い他動性を示す。また、語用論的關係節と呼ばれる動詞の項以外を被修飾語とする日本語の連体修飾表現の存在は、本研究で提案する認知モード転換に基づくアプローチの理論的妥当性を支持する。

(Koguma 2007)

(3)韓国語属格主語の先行研究と問題点

次に、本研究で日本語と対照する韓国語に関する先行研究の指摘とその問題点を概観する。

Horie and Kang (2000)は、現代韓国語では、属格主語は形容詞、存在述詞など他動性が低い述詞とともに基本的には現れず、概ね動詞述部の場合に限定されると指摘し、日韓の相違を、{動詞(Verb) > 存在述詞(Existential predicate) > 形容詞(Adjective) > 繫合詞(Copula)}という他動性(Agentivity)の階層スケールにおいて、ある言語があるレベルで交替を許すのなら、それより他動性の高いレベルでも交替が生じる、という含意法則によって統一的に捉えられると提案している。次の(c)が示すように、日本語は基本的に形容詞まで、韓国語は基本的に動詞まで属格主語を許すとする一般化である。

(c)	←高い	他動性	低い→
	日本語 {動詞 存在述詞 形容詞}?コピュラ		
	韓国語 {動詞} 存在述詞 形容詞 コピュラ		

しかし、日本語において他動性が低いほど属格主語と相性がよく、逆に他動性制約にみられるように他動性が高いほど属格主語が生じにくいことが確認できており、Horie and Kang (2000)の一般化は日本語の主格・属格交替の本質を捉えていない。

(4)韓国南部方言における属格主語

属格主語の容認度に関して、南部方言話者(釜山近郊出身)の一人に対する聴き取り予備調査において、一般に報告されているより寛容である可能性が示唆された。これを踏まえ、韓国南部の麗水でアンケートと聞き取り形式とで現地調査を行った。その結果、韓国語の南部方言においては標準的韓国語とは異なり、必ずしも属格主語が非文にはならないことが明らかになった。次にあげた3つの例のうち、(f)については当該方言話者のほとんどが極めて不自然だと判断したのに対して、(d)について51人に尋ねたところ、2人が「自然だ(자연스럽다)」, 3人が「問

題ない(문제 없다)」, 30人が「少し変だ(조금 이상하다)」, 16人が「とても変だ(아주 이상하다)」と判断した。一方、(e)について尋ねた17人のうち、2人は「自然だ」、1人は「問題ない」、6人は「少し変だ」、8人は「とても変だ」と答えた。

- (d)철수의 자주 담배를 사던 집
(チョルスのよく煙草を買っていた店)
- (e)철수의 어제 담배를 산 집
(チョルスの昨日煙草を買った店)
- (f)철수의 자주 담배를 산 집
(チョルスのよく煙草を買った店)

この異なる振る舞いの一方で、南部方言も標準的韓国語と同様に、(i)形容詞述部の主語については他動性の低さにもかかわらず、次に(g)として例を示したように主格に代えて属格助詞のマークできないが(ii)連体節内述語が被修飾語(主要部)と項関係にない、いわゆる語用論的關係節の主語については、(h)として例示したように属格が現れる、といった特徴を示す。

- (g)키{가/*의} 큰 소년
(背{が/の}高い少年)
- (h)고기{가/의} 구워지는 냄새
(肉{が/の}焼ける匂い)

また、これら(i), (ii)のタイプの連体節の主語は、主格でも属格でもなく、次の(i), (j)の例に示したように、いわゆるゼロ格として具現化することが極めて頻繁であることから、それらを主格の가/이, 属格の의, とならんで3つ目の形式として分析する必要があると考えられる。

- (i)키 큰 소년
(背高い少年)
- (j)고기 구워지는 냄새
(肉焼ける匂い)

(5)認知モード分析の類型論的妥当性

(i), (j)を主格の가의省略、つまり「ゼロ主格」と分析するむきもあるが、本研究では、「ゼロ属格」とみなすほうが妥当であろうと提案する。

というのも、日本語の「XノY」という所有表現内の属格ノとは対照的に、対応する韓国語表現「X의 Y」の属格의は随意的である場合が多く、場合によっては現れない(ゼロ格)ほうが自然な場合もかなりあることが指摘されている。これは、韓国語の所有表現「X의 Y」、「X의 Y」は、いずれもXを参照点(R)として標的(T)であるYに心的コンタクトを確立するR/T認知を反映していることを意味している。

日本語の属格助詞「ノ」は「果物のカキ」のように「<上位カテゴリー>ノ<下位カテゴリー>」のように使えるが、韓国語の属格의はこのような用法を持たない。

このような事実を考えあわせると、(i), (j)も R/T 認知を反映した「ゼロ属格」とみなすことができる。つまり、韓国語においては、主格・의属格交替と主格・ゼロ属格が存在するという主張である。(k)に示すように、主格、의属格、ゼロ属格が可能なことから、의属格とゼロ属格がそれぞれどのような関係にあるかは今後の研究課題として残る。

(k) 고기{가/의/φ} 구워지는 냄새
(肉{が/の/φ}焼ける匂い)

いずれにしても、属格主語の連体修飾節は R/T 認知を反映しており、主格でマークされた連体修飾節は tr/lm 認知を反映していると認知プロセスレベルに還元して分析される。したがって、認知モード分析(Koguma 2007)は、韓国語の連体修飾節構文の主語の格マークを基本的に矛盾なく捉えることができる。

(6) 参照点関係に基づく関係節化方略

日本語の連体修飾節表現「[X {ガ/ノ}] V (連体形)]Y」の意味構造は、連体節内の主語名詞と被修飾語名詞の間の「X ノ Y」で表される意味概念上の結束関係 (conceptual grouping) に基づいて意味が合成されており、参照点関係に基づく関係節化方略 (Reference-Point Based Strategy) を反映していると分析した。

これまでの議論から明らかのように、韓国語についても同様に参照点関係に基づく関係節化を反映していると分析が有効であることが明らかになった。

(7) 異なるタイプの主格・属格交替

本研究において、より広範かつ詳細に日本語の連体修飾節構造を観察した結果、属格で格マークされる主語名詞について、(i)節内主語と分析される (Clause- Internal) タイプに加えて、(ii)節外から被修飾名詞句 (主要部) にかかると分析される (Nominal Topic) タイプを措定する必要性が明らかになった。

この2つの分類は韓国語の連体修飾節内の主語の格マークの振る舞いを理論的にうまく捉えることができる。韓国語は日本語とは異なり、(ii)の節外から被修飾名詞句 (主要部) にかかると分析される (Nominal Topic) タイプの主格・의属格交替を潜在的には許す可能性がある一方で、(i)の節内主語 (Clause Internal) タイプと分析される主格・의属格交替を許さないことを示唆していると考えられる。次の(l)のように「X 의 Y」で表現できない関係は、(g)のように主格・의属格交替が生

じない一方で、(m)のように表現可能なケースでは、(h)のように主格・의属格交替が可能な場合があるということである。

(l)*키의 소년
(背の少年)
(m) 고기의 냄새
(肉の臭い)

(8) 類型論的示唆

本研究では、以下にあげた(n)と(o)によって例示されるような、北海道アイヌ語とサハリンアイヌ語の間に観察される節の名詞化に関わる違いが、日本語と韓国語に (程度のさこそあれ) 同様に観察される主格・属格交替と並行なものとして分析することが出来ることを指摘した。

(n) e=san kor an hi an=nukar
(お前が下りてくるのを私は見た)
(o) nean oyasi ox ta asinihi an=nukara
(その化け物のそこへの現れを私は見た)

アイヌ語には、文の主語や、所有者 (possessor) を言語化する名詞句に用いられる (主格や属格のような) 明示的な形式は存在しない。そのため、本来的には主語の格が形式上判然としない。しかし、(n)では人称接辞として具現化している e=が san という動詞の意味上の主語であるのに対して、(o)では動詞 asin が名詞の所属形 (「~の」の意味を持つ所有物 (possession) を表す形) の語尾 -ihi を伴って asinihi という動名詞の形を取っていることから、nean oyasi はその所有者と分析される。韓国語の「ゼロ属格」の分析と同様な観点から分析するとすれば、北海道アイヌ語とサハリンアイヌ語は、連体修飾節の主語表示に関して、「ゼロ主格」と「ゼロ属格」の交替を示すものと捉えられることを明らかにした。

(9) 今後の課題

韓国語についても、アスペクトなどの要素から他動性の低いと判断されるケースにおいて相対的に의属格主語が容認され易い傾向が確認された。

形容詞を述部とする連体修飾節内で의属格主語が容認されない事実に関しては、連体修飾節内ゼロ形主語を、主格ではなく属格として分析することを提案した。連体修飾節内に加えて、主節に生じるゼロ形式主語を今後調査し、ゼロ属格分析の妥当性を検証することが課題として残った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

石川工業高等専門学校・一般教育科・教授
研究者番号：80124022

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 小熊猛(2009) ガ・ノ交替現象から見る日本語の関係節化方略に関する予備的考察, 『日本語文化』(韓国日本語文化学会論文集), 査読有, 第14輯, pp. 19-39
- ② 小熊猛(2007) 認知モード転換と属格・主格交替: いわゆる他動性制約の反例および認知類型論的示唆, 『日本認知言語学会論文集』, 査読無, 第7巻, pp. 55-65

〔学会発表〕(計6件)

- ① K.Izutsu&T.Koguma (2010) Reference-Point-and-Trajectory Interaction: A Unifying Account for Nominative / Genitive-Alternation, CSDL10 (Conceptual Structure, Discourse & Language), University of California San Diego (CA, U.S.)
- ② 中井悟、原田なをみ, 祐伯敦史, 小熊猛, 越智正男 (2008) ガ・ノ交替への認知文法アプローチ, 日本語学会第137回大会ワークショップ「日本語におけるガ・ノ交替現象」(金沢大学)
- ③ 小熊猛 (2008) ガ・ノ交替現象から見る日本語関係節方略に関する予備的考察, 韓国日本語文化学会 2008年度秋季国際學術大會(ソウル東國大 韓国)
- ④ Takeshi KOGUMA (2008) A Cognitive Approach to Nominative/Genitive Conversion in Japanese, CSDL9(Conceptual Structure, Discourse & Language), Case Western Reserve University (Ohio, USA)
- ⑤ 小熊猛 (2008) 主格・属格交替から見る連体修飾構造の認知的類型論的展望と課題, 第287回京都言語学コロキウム(京都大学)
- ⑥ 小熊猛 (2008) ガノノ交替への認知的アプローチ: 認知類型論的展望とその課題, 札幌大学認知言語学セミナー(札幌大学)

〔図書〕(計1件)

- ① Fey Parrill, Vera Tobin, and Mark Turner (eds.), Takeshi KOGUMA (2010) A Cognitive Approach to Nominative/Genitive Conversion in Japanese, In *Meaning, Forms & Body*, CSLIPublications. pp.129-147.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小熊 猛 (KOGUMA TAKESHI)
富山高等専門学校・一般教養科・准教授
研究者番号：60311015

(2) 研究分担者

高島 要 (TAKASHIMA KANAME)